

栃木方言「～ヨウダ」の用法と使用実態

—相手の年齢差と親疎による表現の使用差—

松田 勇一・高丸 圭一

要 旨

栃木県の方言では、「～ナケレバナラナイ」等の意味内容を表す際に、「～ヨウダ」を用いることがある。これは、標準語「～ヨウダ」の用法にはないものであり、栃木方言に特有の用法と考えられる。

本研究では、栃木方言「ヨウダ」の使用実態と標準語の当為表現の使い分けを調査するために、栃木県在住者に対して質問紙調査を実施した。その結果、5つの当為表現（「ナキャナラナイ」、「ナキャイケナイ」、「ナキャ駄目」、「ベキダ」、「ヨウダ」）の中で最も使用率が高いものは「ヨウダ」であること、「ヨウダ」は聞き手の属性が変わっても使用されることが多いこと、当為表現に先行する動詞によって当為表現の使用率に変化はないこと等が明らかになった。また、「～ヨウダ」は、聞き手に対して、当為表現を婉曲的に伝える「当為表現の緩衝機能」を持つことが示唆された。

【キーワード】 栃木方言、「～ヨウダ」、当為表現、緩衝機能、質問紙調査

1. はじめに

栃木県の方言では、「～ナケレバナラナイ」、「～ナケレバイケナイ」、「～ナキャナラナイ」等の意味内容を表す際に、助動詞「ヨウダ」⁽¹⁾を用いることがある。例えば、市役所において職員が訪れた市民に対して「明日また来なければなりません」という内容を伝える場合、「明日また来るようですね」、「あるいは明日また来てもらうようですね」と表現する。栃木県に長く住んでいる者であれば、このような言葉を聞いて、「(私が)明日また来なければならぬのだ」とすぐに理解できるが、標準語では「(第3者が)明日来るらしい」という推量の意味となるため、栃木県の方言（以下、栃木方言）を知らない者に対しては本来の意味内容が伝わりにくい。

「ナケレバナラナイ」、「ナケレバイケナイ」等の表現は、当為表現と呼ばれる（小池他，2002）。小池他（2002）は、ある目的を達成するために必要とされる行為を相手に促す表現を当為表現と定義している。また、当為表現としては、「ネバナラヌ」、「ネバナラナイ」、「ナケレバナラヌ」、「ナケレバナラナイ」、「ナケレバイケナイ」、「ナケレバ駄目ダ」、「ナクテハイケナイ」、「ナクテハ駄目ダ」、「ベキダ」等があるとしている。益岡他（1992）でも、同様の言語形式を取り上げている。本研究では、このような当為表現と同じ意味内容を持つ「～ヨウダ」を栃木方言における当為表現「～ヨ

ウダ」と呼ぶ。

栃木方言に関する研究、書籍には様々なものがあるが、その多くは語彙、アクセント、イントネーションに関するもの（森下，1999；2003；嶋，2003；高丸・松田，2006；2007a；2007b；松田・高丸，2006；まいふれ那須，2006）であり、管見によると文法を扱ったものは殆どない。

大橋（1963）は、栃木方言における助動詞「サル」について論じた²⁰。また、平山（2004）は、栃木方言の文法項目として、意思・勧誘の「ベ」、否定形の「ネ」、丁寧表現の「ガンス」等を扱っているが、両者とも「ヨウダ」については触れていない。「ヨウダ」が、栃木方言として取り上げられていない理由は、標準語としても「ヨウダ」という形式が存在する為に言語形式として目立たず、また当該の意味内容が特殊なものとして認識されていなかった為と考えられる。

松田・高丸（2008）では、まず標準語と栃木方言の「ヨウダ」の意味内容と用法を整理し、栃木県在住者が実際に当為表現として「ヨウダ」を使用することを明らかにしている。しかしながら、そこでの「ヨウダ」の用例数は極めて少なく、当為表現の使い分け等も示されていない。そこで本研究では、栃木方言における当為表現「ヨウダ」の使用実態を調査し、その結果を示す。また、標準語の当為表現との使い分け等を示し、栃木方言「ヨウダ」の使用実態を明らかにすることを研究目的とする。

2. 「～ヨウダ」の意味・用法

2.1 標準語の「～ヨウダ」の意味・用法

山口他（2001）によると、助動詞「ヨウダ」の意味は、以下の4つに分類される。

- (1) 様子から想像できるが、そうとはっきり断定できないという話し手の心情を表す。不確かな断定。「北の国では雪が降ったようだ」「午後には雪が降るようだ」
- (2) その物事の持つ属性・状態と同じ属性・状態のあることを示す。「例え」「比喻」「比況」という意味を表す。「粉のようなさらさらとした雪が降る」「氷のような冷たさである」
- (3) 説明するために引かれた例であることを示す。例示。「戦争のような惨事が二度とあってはならない」「隣のおじさんのように親切な人はいない」
- (4) その状態が現れていることをいう。「合格するように祈る」「よろしくお伝えくださるよう」

グループ・ジャマシイ（1998）によると、以下の意味・用法に分類される。

- (1) 比況「この雪はまるで綿のようです」「男は狂ったように走り続けた」
- (2) 例示「あの人のように英語がべらべら話せたらいいのに」「これはどこにでもあるようなものではない」
- (3) 前置き「ご存知のように、日本は人口密度の高い国です」「ことわざにもあるように、外国に行ったらその国の習慣に従って暮らすのが一番である」
- (4) 次のように「中には以下のような意見もあった」「本稿の結論をまとめれば、次のようになる」
- (5) 推量「あの人はこの大学の学生ではないようだ」「どうやら君の負けのようだね」

- (6) 感じ・予感「もう他に方法はないような気がする」「運動したら、何だか体が軽くなったような感じだ」
- (7) 感覚・印象「こちらの方がお似合いになるように思います」「あの二人はとても仲がいいように見える」
- (8) そのような様子では「こんな問題が解けないようではそれこそ困る」「こんなことができないようでは、話にならない」
- (9) 見かけの印象「一見やさしいようで、実際やってみると案外むずかしい」「ふだんはおとなしいようでいて、いざとなるとなかなか決断力に富んだ女性です」
- (10) 矛盾内容の共存「僕の言ったことが彼にはわかったようでもあり、全く理解していないようでもある」「この会社での30年間は、あっと言う間だったような感じもします」
- (11) 場合「遅れるようだったら、お電話ください」「明日お天気が良いようでしたら、ハイキングに行きませんか」

また、グループ・ジャマシイ（1998）では、「ヨウダ」の他に「ヨウニ」の分類を立て、以下の用法を挙げている。

- (1) 目的「後ろの席の人にも聞こえるように大きな声で話した。」「忘れないようにノートにメモしておこう」
- (2) 勧告「忘れ物をしないようにしてください」「私語は慎むようにしなさい」
- (3) 祈願「息子が大学に合格できるように神に祈った」「すべてがうまくいきますよう」
- (4) 要求内容の間接引用「すぐ家に帰るように言われました」「これからは遅刻しないように注意しておきました」
- (5) 行為・状況を成立させることを目指す「私は肉を小さく切って、こどもにも食べられるようにした」「油ものは食べないようにしている」
- (6) 状態の変化「日本語が話せるようになりました」「注意したら文句を言わないようになった」

先行研究では、以上のように「ヨウダ」、「ヨウニ」の意味・用法が分類されているが、当為表現としての用法は見当たらない。意味内容が近いものとしては、「ヨウニ」の(2)勧告、(4)要求内容の間接引用が挙げられるが、栃木方言「ヨウダ」とは形式が異なっている。したがって、栃木県において使用されている当為表現「ヨウダ」は、標準語の用法にはないということである。

2.2 栃木方言の「～ヨウダ」の意味・用法

松田・高丸（2008）では、以下の用例を示し、当為表現「～ヨウダ」を説明している。

- (1) Aは、Bの作成した文書をチェックし、もう一度やり直すように指示をする場面

A：Bさん、この書類、誤字があったんですが・・・。

B：あっ、すみません。これじゃ、まずいですよね。

A：ええ、もう一度、書類、作るようですね。

この例は、当為表現で表される行為を聞き手が行わなければならないという場面である。下線部分において、標準語の当為表現を用いるとすれば、「作らなきゃならないですね」、「作らなきゃ駄目ですね」等が挙げられる。しかし、栃木方言では下線部分のように「ヨウダ」を用いる。

(2) AとBは、一緒に仕事をしており、明日もまた来なければならないという場面

A：今日中には、終わんないねえ。

B：そうだね、まだまだ時間かかるね、これは。

A：うん、明日も来るようだね。

この例は、当為表現で表される行為を聞き手と話し手が共に行わなければならないという場面である。下線部分は、栃木方言においては「私たちは来る必要がある」、「私たちは来なければならない」という意味である。標準語として下線部分を捉えると、「(第3者が)来るらしい」という推量の意味になるが、栃木方言では当為表現となる。

(3) AはBの家に遊びに来ているが、雪が激しく降り始めたので家に帰るという場面

A：うわー、雪、すごいよ。

B：本当だ。これは、積もるね。

A：雪、積もんないうちに帰るようだね。

この例は、当為表現で表される行為を話し手自身が行わなければならないという場面である。下線部分は、栃木方言においては「帰らなければならない」、「帰った方が良い」という意味である。当為表現とは、相手に対してある行為をするように促す表現であるが、話し手自身が行うべきことを表現する際にも用いられる。この場合は、「義務表現」と呼んだ方が適切だと思われるが、本研究では当為表現として一括する。(3)の下線部分は、A自身が「自分は帰った方が良い」と言っており、「第3者が帰るらしい」という意味ではない。

松田・高丸(2008)では、以上の会話例により当為表現「ヨウダ」の意味・用法を示している。これらは標準語では「ナキャナラナイ」、「ナキャ駄目ダ」、「シカナイ」、「方が良い」等に相当するものであるが、標準語の「ヨウダ」にはこのような用法は存在しない³⁾。

また、松田・高丸(2008)では、栃木方言「～ヨウダ」は、「標準語の当為表現では言い方がきつくなる場合や、丁寧に話したい場合等に使われるという特徴がある」と述べている。しかし、これは研究者の内省によるものであり、実際のデータとして確かめられていない。そこで、本研究では質問紙調査で得られたデータを用い、標準語の当為表現と栃木方言「～ヨウダ」の使い分けについても考察する。

3. 調査方法

3.1 質問紙

栃木県在住者が、当為表現としての「～ヨウダ」をどのように使用しているのかを観察するために、質問紙調査を行った。調査票は、フェイスシートと当為表現に関する質問からなっている。フ

ェイスシートには、被験者の性別、年齢、居住歴等の記入欄、回答方法を示した。当為表現に関する質問部分⁽⁴⁾は、まず、話者 A と話者 B の関係と場面を示し、次に、A と B の対話文を示した。話者 A は被験者自身であり、B は親しい年上、初対面の年上、親しい同年、初対面で同年位の人という 4 つの設定を設けた。これは、会話の相手との年齢差、親疎により差が見られるかどうかを確認するためである。対話文は、A の最後の部分（当為表現を使うべき箇所）に 5 つの当為表現「～ナキャナライ」、「～ナキャイケナイ」、「～ナキャ駄目」、「～ベキ」、「～ヨウ」を用いた表現が示されている。回答者には、これらの表現を普段使用するかどうかを答えてもらった。なお、各当為表現の後ろには、「(デス/ダ)ネ」を付し、自然な会話表現になるようにした。場面については、(1) A が B の作っている書類のチェックを頼まれそれを B に返した場面、(2) A と B が一緒に書類を作っている場面、(3) A が B に頼まれた書類を作っている場面、の 3 つである。3 つの場面は、当為表現で表される行為が誰によって行われるのかによって、表現に違いがあるかどうかを見るために設定した。(1)は当該行為を聞き手 B が行う、(2)は当該行為を話し手 A と聞き手 B が共に行う、(3)は当該行為を話し手 A が行う場面である。会話者間の関係が 4 種類、当該行為の行為者が 3 種類で、12 の場面設定からなっている。また、各場面には 4 つの会話があり、会話文は待遇表現を固定しないよう、文末（「です」、「ます」等）は省略し示した。4 つの会話を設けた理由は、話者間の関係、場面が同じであっても、使われる動詞によって、「ヨウダ」の使用に違いが見られるかどうかを観察するためである。

3.2 調査対象

調査は 2007 年 10 月から 12 月にかけて、栃木県在住の 59 名（男性 32 名、女性 23 名）を対象に行った。その内、栃木県在住歴 5 年未満の者 4 名（男性 3 名、女性 1 名）を除く、55 名分のデータを分析に用いた。なお、55 名の年代の内訳は以下の通りである。

表 1 調査対象者の内訳

10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	合計
2	14	17	9	7	4	2	55

4. 結果と考察

4.1 全体の結果

表 2 は、調査結果全体を 5 つの当為表現ごとに集計した結果である。 χ^2 検定の結果、度数の偏りは有意であった ($\chi^2(4)=622.73, p<.01$)。表 2 によると、全体としては「ヨウダ」が最も使用率が高く、次いで「ナキャナライ」、「ナキャイケナイ」、「ナキャ駄目」であり、「ベキダ」は当為表現としては使用されることが少ないと言える。松田他 (2008) の調査では、「ヨウダ」の用例は極めて少数であったが、この結果から、栃木県在住の者は「ヨウダ」を頻繁に用いるということが言える。

表2 全体結果

当為表現	度数	%	N (欠損値)
ナキャナラナイ	1180	46.5	2538 (102)
ナキャイケナイ	1124	44.2	2541 (99)
ナキャ駄目	1079	42.9	2518 (122)
ベキダ	347	13.8	2510 (130)
ヨウダ	1403	55.4	2531 (109)

4.2 話者間の年齢差・親疎

表3は、相手が親しい年上、初対面の年上、親しい同年、初対面の同年位、各々に分けた集計結果である。以下では、年齢・親疎ごとに考察を行う。

(1) 親しい年上×初対面の年上

表3において、相手が親しい年上の場合、初対面の年上の場合の集計結果を基に χ^2 検定を行った。その結果、度数の偏りは有意であった($\chi^2(4)=68.50, p<.01$)。また、残差分析の結果、親しい年上における「ナキャナラナイ」、「ナキャイケナイ」が有意($p<.01$)に少なく(初対面では有意に多く)、「ナキャ駄目」が有意($p<.01$)に多い(初対面では有意に少ない)ということが明らかになった。表3に示した通り、「ナキャ駄目」の使用率は、親しい年上の場合と初対面の年上では、30%程の違いがある。また、「ヨウダ」は、親しい年上の方が使用率が高く、56.8%に達している。

表3 年齢・親疎ごとの結果

表現 \ 相手	年上		同年	
	親しい	初対面	親しい	初対面
ナキャナラナイ	293 (45.9)	312 (49.0)	278 (44.1)	297 (47.0)
ナキャイケナイ	282 (44.1)	303 (47.5)	263 (41.8)	276 (43.5)
ナキャ駄目	325 (51.1)	136 (21.6)	374 (59.6)	244 (39.1)
ベキダ	85 (13.5)	92 (14.7)	97 (15.3)	73 (11.7)
ヨウダ	356 (56.8)	304 (47.4)	381 (60.5)	362 (57.2)

表中の数値は度数、括弧内は百分率。

(2) 親しい同年×初対面の同年

表3において、相手が親しい同年の場合、初対面で同年位の場合の集計結果を基に χ^2 検定を行った結果、度数の偏りは有意であった($\chi^2(4)=24.71, p<.01$)。また、残差分析の結果、親しい同年にお

ける「ナキャナラナイ」、「ナキャイケナイ」が有意 ($p < .05$) に少なく (初対面では有意に多く)、「ナキャ駄目」が有意 ($p < .01$) に多い (初対面では有意に少ない) ということが明らかになった。これは、相手が年上の場合の傾向と同一である。したがって、このことから、年齢の上下にかかわらず、親しい相手には初対面の相手よりも「ナキャ駄目」の使用率が高く、「ナキャナラナイ」、「ナキャイケナイ」の使用率は低いと推測できる。また、「ヨウダ」に関しては、相手が親しい同年の場合は6割を超えており、初対面の場合でも57.2%と高い率を示している。このことから、「ヨウダ」の使用率も、年齢にかかわらず、親しい相手に対しての方が初対面の相手に対してよりも高いということが予想される。これは、初対面の相手に対しては、規範意識が働き、より正確な表現、あるいは標準語を使おうとするからであろう。なお、年齢の影響については、以下(3)、(4)で詳しく考察する。

(3) 親しい年上×親しい同年

表3において、相手が親しい年上の場合、親しい同年場合の集計結果を基に χ^2 検定を行った。その結果、度数の偏りは有意ではなかった ($\chi^2(4)=5.14, n.s.$)。つまり、相手が親しい場合、年齢による当為表現の使用には差が見られないということである。これは、(2)で述べた部分であるが、検定により確認された。

(4) 初対面の年上×初対面の同年

表3において、相手が初対面の年上の場合、初対面の同年の場合の集計結果を基に χ^2 検定を行った結果、度数の偏りは有意であった ($\chi^2(4)=35.03, p < .01$)。したがって、(2)で述べた「年齢にかかわらず」というのは、「親しい関係」においてのみ成立するということである。また、残差分析の結果、初対面の年上における「ナキャナラナイ」、「ナキャイケナイ」、「ベキ」が有意 ($p < .05$) に多く (初対面同年では有意に多く)、「ナキャ駄目」が有意 ($p < .01$) に少ない (初対面同年では有意に多い) ということが明らかになった。表3に示した通り、初対面の年上では、「ナキャ駄目」の使用率は21.6%と低い。一方、初対面であっても同年位の相手であれば、「ナキャ駄目」の使用率は4割近くに達する。

4.3 話者間の年齢差・親疎のまとめ

年齢差、親疎による当為表現の使用率の違いは、図1のように示すことができる。図1に示した通り、親しい年上と親しい同年では、当為表現の使用に違いがないが、他の2者間では違いが見られた。しかし、「ヨウダ」に関しては、全ての残差分析において優位な差が見られなかった。これは、相手の年齢、親疎にかかわらず、使用率が高いからであろう。事実、4種類の話し相手の中で、初対面の年上のみが「ナキャナラナイ」が最も使用率が高いが、その他では「ヨウダ」が最も使用率が高い当為表現となっている。したがって、栃木県在住者は、相手との年齢や親疎にかかわらず、「ヨウダ」を用いることが多く、その他の当為表現は相手によって使い分けしていると言える。

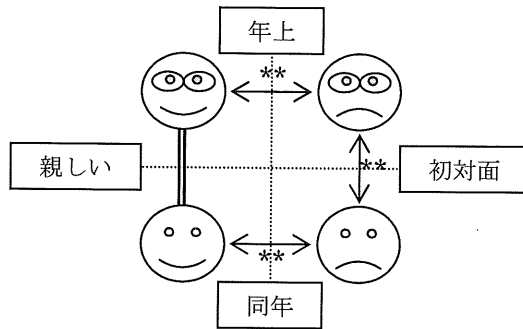


図1 相手の年齢差・親疎による当為表現使用の差 (** $p<.01$ 、無印 n.s.)

4.4 発話内容の行為者

表4は、当為表現で伝えられた内容を誰が行うのかによって分類集計した結果である。表中、「聞き手」は当該行為を聞き手Bが行う場面、「両者」は当該行為を話し手Aと聞き手Bが共に行う場面、「話し手」は当該行為を話し手Aが行う場面である。

表4を基に χ^2 検定を行った結果、度数の偏りは有意であった($\chi^2(8)=36.15, p<.01$)。また、残差分析の結果を表5に示す。表5に示した通り、「聞き手」では、相対的に「ナキャ駄目」が少なく、「ヨウダ」が多い。これは、「ヨウダ」が他の当為表現よりも、婉曲的に義務行為を表現することができるためだと考えられる。実際、栃木方言話者は、「ヨウダ」が他の当為表現よりも「柔らかい」、「優しい」という意識を持っているようだ。逆に、「ナキャ駄目」は、当該行為に対する義務感を強く押し付けるため、相手が当該行為を行う際には、使用率が低くなると考えられる。また「両者」では、「ナキャナラナイ」が多く、「ナキャ駄目」が少ない。「話し手」では、「ナキャナラナイ」、「ヨウダ」が少なく、「ナキャ駄目」、「ベキ」が多い。これは、「ヨウダ」とは反対に、当該2つの当為表現が義務意識、負荷意識を強く表すためではないかと思われる。話し手自身が行うことであれば、直接的な表現でも可能だが、相手が行うことには「ヨウダ」を用いて婉曲的に表現する傾向が強いということであろう。つまり、栃木方言「ヨウダ」は当為表現を緩衝する機能を持ち、栃木方言話者は聞き手が当該行為を行う場合において直接的な当為表現よりも柔らかい「ヨウダ」を用いることが多いということである。なお、森田(1988)は当為表現で表される義務感の違いについて述べているが、その中では「ナケレバナラナイ」と「ナケレバイケナイ」を扱っており、婉曲的な当為表現は取り上げていない。

表4 発話内容の行為者ごとの結果

	聞き手	両者	話し手
ナキヤナラナイ	396(46.5)	422(49.8)	362(43.1)
ナキヤイケナイ	364(42.2)	388(46.1)	372(44.4)
ナキヤ駄目	314(37.1)	338(40.2)	427(51.4)
ベキダ	102(12.0)	107(12.8)	138(16.7)
ヨウダ	498(58.9)	478(56.2)	427(51.1)

表中の数値は度数、括弧内は百分率。

表5 表4の調整された残差

	聞き手	両者	話し手
ナキヤナラナイ	0.79	1.66 †	-2.44*
ナキヤイケナイ	-0.18	0.61	-0.43
ナキヤ駄目	-2.77**	-1.90 †	4.65**
ベキダ	-1.32	-1.19	2.51*
ヨウダ	2.70**	0.29	-2.97**

(†p<.10 *p<.05 **p<.01)

また、表4を年齢・親疎ごとに分類、集計し、4種類の話し相手ごとに χ^2 検定を行った。その結果、親しい年上、親しい同年においては、当為行為を誰が行うのかによる差は見られなかった（親年上 $\chi^2(8)=12.24, n.s.$ 親同年 $\chi^2(8)=7.13, n.s.$ ）。しかし、初対面の年上、初対面の同年においては、当該行為の行為者による差が見られた（初年上 $\chi^2(8)=29.82, p<.01$ 初同年 $\chi^2(8)=16.47, p<.01$ ）。また、初対面の年上、初対面の同年での残差分析において、当該行為を聞き手が行う場合には有意に「ヨウダ」が多く、話し手が行う場合には「ナキヤ駄目」が多いという全体と同様の結果が得られた。したがって、相手との関係が親しい場合は、当該行為を誰が行うのかによって表現の選択が変化することはないが、相手が初対面の場合は当為表現を変えることができる。

4.5 動詞による当為表現

調査は、大きく12の場面設定から構成されているが、各場面において4つの会話文がある。4つの会話文では、それぞれ当為表現で表される動詞が異なっている。当該行為を聞き手が行う場合、及び話し手と聞き手が共に行う場合は、「やる」、「書く」、「来る」、「出す」、当該行為を話し手が行う場合は、「直す」、「書く」、「来る」、「出す」である。以下、当該行為の行為者ごとに結果を示す。

表6 発話内容を聞き手が行う場合の動詞ごとの結果

	やる	書く	来る	出す
ナキヤナラナイ	102(48.1)	105(49.1)	91(42.9)	98(45.8)
ナキヤイケナイ	85(39.2)	86(40.0)	93(43.1)	100(46.7)
ナキヤ駄目	73(34.3)	80(37.7)	71(33.8)	90(42.7)
ベキダ	29(13.7)	26(12.3)	21(9.9)	26(12.2)
ヨウダ	123(58.3)	124(58.8)	131(61.5)	120(57.1)

表中の数値は度数、括弧内は百分率。

表7 発話内容を話し手と聞き手が行う場合の動詞ごとの結果

	やる	書く	来る	出す
ナキヤナラナイ	110(51.6)	103(48.8)	101(47.6)	108(51.2)
ナキヤイケナイ	94(44.8)	96(45.7)	100(47.2)	98(46.9)
ナキヤ駄目	85(40.5)	82(39.2)	82(39.0)	89(42.0)
ベキダ	25(12.0)	30(14.3)	25(12.0)	27(13.0)
ヨウダ	117(54.9)	121(56.8)	120(56.9)	120(56.1)

表中の数値は度数、括弧内は百分率。

表8 発話内容を話し手が行う場合の動詞ごとの結果

	直す	書く	来る	出す
ナキヤナラナイ	92(43.6)	92(44.0)	86(41.0)	92(44.0)
ナキヤイケナイ	92(44.2)	93(44.3)	91(43.5)	96(45.5)
ナキヤ駄目	104(49.5)	109(53.2)	104(50.0)	110(52.9)
ベキダ	34(16.3)	38(18.6)	33(15.9)	33(15.9)
ヨウダ	100(48.1)	108(51.7)	112(53.6)	107(51.2)

表中の数値は度数、括弧内は百分率。

表6は当該行為を聞き手が行う場合、表7は当該行為を話し手と聞き手が共に行う場合、表8は当該行為を話し手が行う場合において、動詞ごとに当為表現を集計した結果である。各々の表を基に、 χ^2 検定を行った結果、度数の偏りは有意ではなかった(表6 $\chi^2(12)=6.34, n.s.$ 表7 $\chi^2(12)=1.55, n.s.$ 表8 $\chi^2(12)=1.39, n.s.$)。したがって、当為表現は先行する動詞には関係なく使用されることができると言える。調査以前は、先行する動詞との共起性、言い易さなどが存在するのではないかと考えていたが、調査で用いた基本動詞においては、そのような傾向は見られなかった。

5. まとめと今後の課題

本研究は、栃木方言「ヨウダ」の用法、及びその使用実態と標準語の当為表現の使い分けを考察したものである。栃木県在住者を対象に質問紙調査を行い、その結果、以下の点が明らかになった。

- (1) 5つの当為表現（「ナキヤナラナイ」、「ナキヤイケナイ」、「ナキヤ駄目」、「ベキダ」、「ヨウダ」）の中で、最も使用率が高いものは「ヨウダ」である。
- (2) 「ヨウダ」は、聞き手の属性にかかわらず、使用率が高い。
- (3) 聞き手が親しい場合、聞き手の年齢による当為表現の使用率に変化は見られない。
- (4) 当該行為を聞き手が行う場合、「ヨウダ」の使用率が高く、「ナキヤ駄目」が低い。当該行為を話し手と聞き手が共に行う場合、及び話し手が行う場合は、「ヨウダ」の使用率が低くなり、「ナキヤ駄目」が高くなる。
- (5) (4)は、話し手の聞き手に対する配慮、つまり当為表現を婉曲的に伝えようとする態度の表れであり、「～ヨウダ」が当為表現を緩衝する機能を持つことを示唆するものである。
- (6) 聞き手が親しい場合は、当該行為の行為者による当為表現の使用率に変化はないが、聞き手が初対面の場合には、使用率に変化がある。
- (7) 当為表現に先行する動詞によって、当為表現の使用率に変化はない。

本稿では、紙面の都合上、調査文の詳細な説明、3条件（親疎×年齢×行為者）の分析などができなかった。今後は、それらに加え、被験者の年代や音声データによる調査も考慮し、研究を精錬させていきたい。

注

- (1) 「ヨウダ」は、名詞「ヨウ」と助動詞「ダ」とするものもあるが、本研究では山口他（2001）に倣い「ヨウダ」は一語の助動詞として考える。
- (2) 大橋（1963）は助動詞「サル」を取り上げ、栃木県においては①自発の表現（例：タバコはやめたいんだけど、吸わさっちゃう。）、②偶然性・意外性などの表現（例：今日は30分早く行がさった。）、③可能的な表現（例：そんなにたくさん食わさんねえ。）、④状態・結果などの表現（例：豆も取らさる。）として用いられるとしている。
- (3) 2.1でも述べたが、栃木方言「ヨウダ」に意味内容に近いものとしては、グループ・ジャマシイ（1998）の分類「ヨウニ」の(2)勧告、(4)要求内容の間接引用がある。当為表現としての用法は、これらから派生した可能性もある。

<勧告>

おしゃべりは慎むようにしなさい。……………
 時間内に終了するようお願いします。……………
 集合時間は守るように（してください）。……………

<栃木方言>

おしゃべりは慎むようだよ。
 時間内に終了するようだよ。
 集合時間は守るようだよ。

<要求内容の間接引用>

学校に来るように言われました。……………
 携帯に電話するように伝えてください。……………
 小さな声で話すように頼んだ。……………

<栃木方言>

学校に来るようだ。
 *携帯に電話するようだよ。
 *携帯に電話するようだよ。

「ヨウニ」の「勧告」では、「ヨウニ」に「しなさい」、「お願いします」、「してください」等、直接的に命令、指示する言語形式が後続する。また、「ヨウニ」の「要求内容の間接引用」では、「言われました」、「伝えて」、「頼んだ」等、引用を示す言語形式が後続する。しかし、それらの後続する部分が助動詞「ダ」に代用されると、栃木方言「ヨウダ」の言語形式と同一となる。また、「勧告」については、その意味内容も極めて類似する。よって、栃木方言「ヨウダ」は、これらの用法から派生したものである可能性がある。しかしながら、「ヨウニ」の「勧告」は聞き手の行動についてであり、話し手と聞き手が共に行うことにも使用できる栃木方言「ヨウダ」とは、一致しない部分もある。したがって、まず当為表現を聞き手が行う場合の用法が定着し、次いで聞き手と話し手が共に行う場合、さらに話し手自身が当為表現を行う場合にも、用法が拡大していった可能性もある。

- ① 明日、学校に来るようにしてください。(標準語)
- ② 明日、(あなたは) 学校に来るようだね。(栃木方言)
- ③ 明日、(一緒に) 学校に来るようだね。(栃木方言)
- ④ 明日、(私は) 学校に来るようだね。(栃木方言)

栃木方言「ヨウダ」の語源については改めて調査が必要であるため、ここでは以上のような可能性もあるということを書き留める。

(4) 調査票の当為表現に関する質問部分は、具体的には以下のような形式である。

○A はあなた、B は近所の親しい年上の人です。あなたは、B さんにチェックを頼まれた書類を返しました。

A : B さん、この書類、数字が違うような気が…。

B : あっ、本当だ！ やり直しかあ…。

A : もう一度、

()	やらなきゃならないですね
()	やらなきゃいけないですね
()	やらなきゃだめですね
()	やるべきですね
()	やるようですね

調査では、A の最後の部分は、普段使うものには○、使わないものには×を付してもらった。

参考文献

- (1) 大橋勝男 (1963) 「栃木方言における助動詞『さる』」『栃木県高等学校国語研究会』
- (2) グループ・ジャマシイ (1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- (3) 小池清次・小林賢次・細川英雄・山口佳也 (2002) 『日本語表現文型辞典』朝倉書店
- (4) 嶋均三 (2003) 『笑典 北とちぎ方言集』下野新聞社
- (5) 高丸圭一・松田勇一 (2006) 「那須地域の方言における句末イントネーションの予備調査－基本周波数パタンの特徴分析と分類－」『都市経済研究年報 第6号』宇都宮共和大学都市経済研究センター
- (6) 高丸圭一・松田勇一 (2007a) 「那須地域の日本人学生と外国人留学生の自発音声に関する研究 ①－模擬対話における聞き返し型疑問文のアクセントとイントネーション－」『宇都宮共和大学論叢 第8号』
- (7) 高丸圭一・松田勇一 (2007b) 「那須地域の若年層に見られる方言語彙(2)－類語辞典に基づく方言語彙の意味分類－」『都市経済研究年報 第7号』宇都宮共和大学都市経済研究センター
- (8) 平山輝男編 (2004) 『栃木県の言葉』明治書院
- (9) まいぶれ那須編 (2006) 『ごじゃっぺこくでねー栃木弁大全集』随想舎
- (10) 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法 改訂版』くろしお出版
- (11) 松田勇一・高丸圭一 (2006) 「那須地域の若年層に見られる方言語彙(1)－方言データベースの作成と予備調査の結果から－」『都市経済研究年報 第6号』宇都宮共和大学都市経済研究センター
- (12) 松田勇一・高丸圭一 (2008) 「栃木方言における当為表現『～ヨウダ』の用法」『宇都宮共和大学論叢 第9号』
- (13) 森下喜一 (1999) 『栃木の方言をたずねて』白帝社
- (14) 森下喜一 (2003) 『栃木弁ばんざい』随想舎
- (15) 森田良行 (1988) 『日本語の類意表現』創拓社 (pp.205-209)
- (16) 山口明穂・秋元守英編 (2001) 『日本語文法大辞典』明治書院

附記：本稿は、2008年9月13日、14日に愛知大学で開催された「社会言語科学会第22回大会」に於いてポスター発表を行った内容に加筆、修正したものである。